

鬼師の世界

—— 黒地：鬼十 ——

The World of Ogre-tile Makers

—— “Kuroji” as Fired Tiles: Oniju ——

高原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Absuract

Oniju belongs to the fourth group of ogre-tile makers in Sanshu, Japan. The meaning by the fourth group is relatively new ogre-tile makers among them. The depth of the generation is up to the third generation, and not more than that. The case of Oniju shows us how Oniju’s management had changed according to the change of Japanese society. It is as if it were a mirror of the society.

Onijyu started as a traditional hand-made ogre-tile maker. It was the age of the first generation. That is to say that it was the age of the founder, Jutaro Hattori. When the second generation started the management of Oniju after Jutaro, the second generation, Sueo introduced a machine to make ogre-tiles. Then, when the third generation, Akihiko joined the management with Sueo, they stopped making ogre-tiles, and then, they became an ogre-tile broker. However, it was in the 1990s when they finally became a traditional hand-made ogre-tile maker again. Oniju’s case is an good example when we examine how ogre-tile makers are related to the society.

三州鬼瓦を生産する鬼板屋を各々系図上から繋がりのある群に分け、第1グループ、第2グループ、第3グループとし、現在、最後のグループにあたる第4グループについてまとめている。このグループに属する鬼板屋は「丸市」、「萩原製陶所」、「鬼福製鬼瓦所」、「藤浦鬼瓦」、「柳沢鬼瓦」、「山下鬼瓦」、そしてこれから紹介する「鬼十」が挙げられる。「山下鬼瓦」以外はすでに完成している。ここでは「鬼十」についてこれまで調べてきた事を中心にまとめてみたい。すでに「丸市」から始まる第4グループの鬼板屋について『鬼師の世界』の中で述べてきているように、このグループは鬼板屋としての起源が比較的新しい事が大きな特徴の一つとしてあげられる。長くて三代どまりというのが基本的な鬼板屋としての構造であり、鬼板屋の系図そのものがシンプルな形となっている。ここ三州鬼板屋の中においては明らかに後発の鬼板屋群といえよう。別の言葉で言うと、三州の鬼瓦づくりの伝統が広がって行く様を示している鬼板屋群なのである。

このグループ分けはあくまで私個人が採った「鬼師の世界」を描く上での便宜上の処置であり、また同時に一つの見方、解釈でもある。それゆえ、決して固定的な見方でもないし、現場で鬼瓦を作っている人々がこの様なわけ方をしているという事ではない。フィールドワークをやりながら、いかに個々の鬼板屋を全体として捉える事ができるかと考えた末の大きな見取り図のようなものといえよう。「鬼師の世界」地図と見る事も可能である。系図とは別の集合の世界を示している。

鬼十へは平成12年(2000)の1月18日に初めて訪れている。現在が平成21年11月1日なので書き始めるのにおよそ9年の歳月が流れている。これは当初、次々と鬼板屋通いを繰り返しながら、頭の中で鬼板屋の地図を手探りをするように作っており、その結果、鬼十の第4グループの確認が見えたからである。そして第1グループから書き始めた次第である。文化の記号化の作業は全体として大幅の遅れてしまったが、その分、社会も鬼十も変化をしていた。また鬼十は世代も交代をしており、変動する鬼師の世界が浮かび上がってきた。同じテーマでもって長期にわたる「文化を書く」(文化の記号化)の作業は初めての経験であり、書くという作業を通して「文化の生成」の過程が見えてきた感触がより強くなってきた気がする。

鬼十

直接に会うことができたのは二代目服部末男と三代目服部秋彦である。初代服部十太郎には会っていない。いやそれどころか、初代十太郎の写真さえも最後の最後までどういふわけか見つからなかった。そして書き始める直前の十月になっていきなり、「見つかりました」といって写真が出て来たのである。何度も鬼十へは足を運び、その都度何かと世話になり、本当に長い間厄介になってきた。他の鬼板屋を一方では次々と書いていたので、

内心やきもきされていたのではとも思う。

初代鬼十、服部十太郎

まず初代服部十太郎から始めたい。明治31年5月8日に現在の碧南市鶴ヶ崎（新川町）で生まれている。現在の鬼十である服部家は昭和の始めに十太郎が分家して新家になったことがきっかけである。十太郎が出た本家は鬼とは全く関係が無かった。

あの、碧南。今の碧南市だけどね、新川町って。それこそ貧乏人のあれで、船の沖仲仕っていうのかねえ、兄さんから聞いた話だけ。うーん、何か、あの、担いで何か降ろしたりなんかやとったらしいで。

ほいで、あの、子供が、兄弟が何人かおったかなあ。五人、五人くらいおったかな、五人かな。女が三人、男が二人だな。五人兄弟か。それで小学校四年生ぐらいいまで行ってねえ、昔の事で。そいから鬼屋さんにねえ、同じ新川町の鬼屋さんここに小僧に出ただね。そいで、始めたんだね。

服部末男が語る鬼十の起源である。すでに伝聞の形になっているが、父十太郎は尋常小学校四年（新川小学校）で卒業し、新川町に当時あった鬼板屋へ小僧として入ったことになる。年齢にして十歳頃のことである。明治42年（1909）の事であった。十太郎の入った鬼板屋は現在の新川駅の近くにあった鬼吉である。鬼吉は大東亜戦争勃発直後にやめたという。戦前からの鬼板屋ということになるが、戦争中に鬼瓦の需要が無くなって行き、廃業する鬼板屋が増え、戦後再興する鬼板屋と他の職業へ移る元鬼板師と二つに分かれ鬼板屋の地図がこのとき大きく塗り変わったのである。それゆえ、鬼吉については現在のところわかっていない。ただ末男は十太郎から少し話を聞かされており次のように鬼吉について述べている。

親父さん（十太郎）の話を聞くとね、大きな鬼屋さん。大家さんでね、昔は、あの、職人さんてゆうかな、小僧さんが沢山おってね。職人さんの養成所みたいなもので、そうゆうとこへ、みんな行って覚えたわけだね。

このように鬼吉はかなり大きな鬼板屋であったことがわかる。そこへ地元の子供たちが、職人になるために当時、尋常小学校を卒業すると沢山入ったのである。その中の一人が十太郎であった。十太郎は兄勝次郎と二人で鬼吉に入り、鬼師になっている。勝次郎は年が

明けて地元で職場を変えながら修業をし、後に鬼金の職人になっている。そして興味深いのは十太郎で、職人になって各地を転々と旅をしながら鬼板の技術を磨いていることである。

話によると、転々と、(鬼板の技術を)覚えてから、職人の。滋賀県とかね、滋賀県の名張とかね、… 三重県だね、三重県の名張(大正5年頃)とかね。誰かの紹介だと思うけど、北海道まで行ってね。「北海道(旭川)の土管屋さん(銭函土管製造工場)で、鬼をこさえた」って言って、そういう話を聞いたけどね。

その当時来た手紙とかなんかあったけど、それはどっかいっちゃとるなあ。

そういう記憶があるなあ。「土管屋さんで鬼を作った」とかってね。当時、北海道でも鬼を使うあれがあったんだなって思って。土管さんは焼き温度が高いからね。

このように何と三河から北海道まで鬼板師がわざわざ鬼を作りに足を伸ばしていたのである。大正10年頃(1921)のことである。そしてその際、現地で通常よりも高温で焼き、北海道の寒さに耐える鬼瓦を作っていたのである。それが土管焼きの鬼瓦であり、焼き物の世界の融通性の高さを示す良い例といえよう。

まあ、若い頃は、だで、旅職人で行って、ほいで、お金儲けて、この地元におけるよりは賃金が良かったものでね。そうゆうとこでお金貯めて、そんで自分に工場借りて始まったわけだね。最初に。

十太郎は、このように鬼吉で年が明けてから、旅職人となり各地を転々として技術を磨きながら生活をしていたのである。末男はさらに付け加えて、なぜ十太郎が鬼板屋を始めたかも話してくれた。

(十太郎は)旅職人だよ。そいで、女の子が、私の姉があるんだけど、その子を連れて行ったみたいだね。ほいで、まあ、学校へ行くようになったで、これは転々と歩いってはいかんでことで、帰って来て、それから借金をして、自分の持つとる金と合わせて始めたわけだね。昭和の始めぐらいだと思うよ。

このように十太郎は碧南の新川町出身で同じ町にあった鬼板屋「鬼吉」で鬼板師になり、旅職人として独立している。今までフィールドワークを行なって来て、この十太郎と同じ

ような動きが鬼福製鬼瓦所初代鈴木福松、鬼百二代目梶川賢一、鬼亮初代梶川亮治、伊藤鬼瓦初代伊藤用蔵といったように碧南では戦前と戦後しばらく、バンクモノ（旅職人）として若い鬼板師が修業のため、生活のため、しばらくの間各地へ渡り歩く慣習があったように思われる。ところがすぐ隣の町の高浜では、こういった習慣は存在していない。鬼板屋としての伝統が碧南の鬼板屋と比べて古い分、鬼板屋としての伝統がすでに確立しており、しかもバンクモノから鬼板屋がそもそも形成されてきたという経緯もあり、鬼板屋で年が明けると、鬼板屋に残って修業するというルートが形成されていたのである。高浜と碧南は隣同士の町ではあるが、全く別の鬼板師の修業の伝統があったことになる。

しかし、十太郎は旅職人から帰ると、故郷の碧南ではなく碧海郡高浜町石ノ塔（現在の高浜市沢渡町）に昭和7年（1932）鬼十を始めた。大物の注文が入ると鬼金にいた兄の勝次郎と一緒に製作したという。（第1図参照）十太郎の息子の末男は自分自身が鬼板師になる過程で見た父十太郎の姿を話してくれた。

仕事の事に関しちゃあ、厳しい人だったね。まあ、私が習い始めた頃は（末男が）作ってみて、（十太郎が）気にいらんと、土場へ作ったものを放り出しちゃったり、足で踏んだり、そういう事をやりよったね。

朝、工場へ入って来て見て、ま、ほいで、壊されなんたら「良かったな」って感じだったね。そういうことは、結構、まあ、覚えるまでは続いたね。



第1図 旧工場にあった達磨窯

十太郎が末男によく言った言葉は「見て覚えろ」であった。まるっきり言葉をかけなかったわけではなかった。末男はさらに言葉を継いで次のように「見て覚えろ」を話すのであった。

そうゆうのの繰り返しで覚えていっただね。まあ、他にも職人さんがおったでね。その人たちが、まあ、一人前の人が作ったのを見たりね、覚えて行くわけで。みんな、職人さんは手え取って、ああで、こうでって一々ね、教えるってのは、あまりね、…。たまには「ここ、こうするだよ」って言って、例えば、あのシビってゆうて彫るね。見本を見せてね。そうゆう事はたまにはあったけどね。

だいたい、どこ行っても、よう見て、あそこのはこうゆう風にやるんだな。これより、あれの方がいいとか。やっぱり、自分で考えて行くもんだもんね。

末男は「見て覚えろ」という父の言葉に付け加えて次のような考えを話すのだった。

まあ、そうゆう事で、覚えていったってゆうかね。まあ、今うちの息子も同じようなもんで、自分のやっぱり、器用さも無きゃいかんし、こういう仕事は。誰でもってわけにもいかんもんね。「やっぱりそうゆう生まれつきのあれがある」ってのかな。それはあるね。まあ、そうゆう事で覚えてきただけどね。

つまり、鬼板師には二つの重要な要件が必要だという事になる。まず「見て覚える」が続けられること。次にそれを支える「生まれつきの器用さ」である。末男ははっきりと誰でも鬼板師にはなれないと断定している。「見て覚える」環境にあっても「生まれつきの器用さ」が無ければ鬼板師にはなれない。「生まれつきの器用さ」があっても「見て覚える」環境が無ければやはり鬼板師にはなれない。この二つの条件が上手く重なり合ってはじめて鬼板師が育ってくる事になる。鬼板師になるための必要条件といえよう。

十太郎は末男には厳しい親方であったが、自分自身にも厳しく常に修業をしていたのであった。末男の気がついた十太郎の後姿である。

やっぱり、自分に、…、やっぱり一つ受けると…、お寺なんか見に行ったりね。「あそこの雲がどうだ」とか、「家はこうしとったけど、あのほうがええかな」とか言って、いろいろ構想を練って、ほいで、決めるわけで。で、帰ってきて図面描いたりして、…。そうゆう事をよくやりよったね。

(仕事を) 請けた後とか、そこから自転車で走っていても、よう立ち止まって(鬼瓦を) 眺めてみたりね。お寺とか。仕事柄、目に付くだよね。そうゆうとこで、参考になることは自分に取り入れて、そうしてやっていたけどね。(第2図参照)



第2図 五三桐紋付覆輪鬼と服部十太郎

十太郎は性格は「気が短い方だった」と末男はいう。「頑固だった」ともいう。「怖い」とも言っている。十太郎のやった仕事で特に末男の記憶に残っているものは終戦後できた名古屋の東別院(現在のものとは違う)と、熱田神宮の仕事だという。いろいろ大きな鬼瓦を作った十太郎だが、間に中間の業者が入ることがほとんどで、実際にどこへ行くのかわからないことが多かったらしい。

末男が覚えている十太郎の良く話していた言葉をいくつか教えてくれた。これは鬼十の一種の家訓といってもいい初代の教えといえよう。

特に鬼のことに関しちゃあまり無いけど、ほいでも、「仕事は…」やっぱりね、「…丁寧にやらなきゃいかん」ってはよう言いよったね。

まあ、変なもの作ると、自分の残るものでね。信用にも関わるし。「そんな安かろう悪かろうって物は作らんがええ」ってね。「あんまり安いこと言えばね、断っ

てやらん方がええ」って、そうゆう事は時々言いよったね。そのぐらいの事でね。
(第3図参照)



第3図 五三桐紋付覆輪鬼吹流足付(第2図の鬼に足を付けて組んだところ)

また十太郎が良く付き合っていた鬼板屋も教えてくれた。「天野」、「鬼百」、「鬼八」、「石治」といった鬼板師たちとは特に親しく行き来していたという。十太郎は時には息子の末男と一緒に連れて、昔そういった鬼板屋へ何度も行った事があるという。それで、私が末男に「工場の中に入れてもらったか」と聞いてみた。

工場ん中は入っとらなんだね。やっぱり、住まいの方ね。昔は、やっぱり、そうゆうところに行くのはお互いあれなんじゃないかなってね。

そうゆうのはあったみたいだね。工場ん中入ったことはないね。

今、割合とオープンだけどね。そうゆう事は。中にはまだ、ちょっと、そうゆう事がない事もないね。たとえ用がって行くとね、「事務所のほうへ行ってくれ」ってね。それだで、ああゆうところは入って来てもらっちゃ困るって事かな。

ちょっとした鬼師同士の付き合いの話から出てきた同業者間の暗黙の了解がここに見えて

くる。いわゆる企業秘密の場所が鬼板師が鬼を作る工場なのである。ここへは鬼板師は互いに遠慮しあい、基本的には顔を覗かせる事はない。何しろ「見て覚える」プロの世界なのであるから、一般人の感覚からでは計り知れないものが在ると考えた方が無難であろう。ただ現在ではこのルールは昔ほど厳密ではなくなってきている。事実そういった話は時々耳にする。しかし基本は崩れてはいないと思われる。私が工場へ入ることが許されているのは私自身がズブの素人であるからに過ぎない。また同時にその事は昔とは変わり、かなりオープンになって来ている証拠でもある。

二代目鬼十、服部末男

二代目服部末男は昭和10年11月14日に生まれている。父十太郎について後を継ぎ、他の鬼板屋に見習いに行く事はせず、ずっと十太郎に習って今に至っている。

小さい頃、そや飯事^{ままごと}ごとみたいな事はやっと思ったけどね。うん。土を触ってね。それはやって来とるけど。「鬼作る」ってことは、まあね。うーん、中学校出てからだね。

まあ、土をいじるようになったっていうと、やっぱり小学校いっとる頃だな。うん。それと、あの、まあ、いつもなんだね、見とるもんで、見様目真似したじゃないけど、あの、覚えたじゃないかな。

末男はこのように小さい頃から土に慣れ親しんでいたが、実際に仕事として鬼瓦を作り始めたのは中学校を卒業してからであった。そして一人前に認めてもらえるようになったのが二十歳の頃のことだったという。

やっぱり、7、8年ぐらいかかったじゃないかね。その前はね、雑用やったり、あの、粘土、土のね、捏ねたり、そういう事をやったり、まあ、そんなことでやってね。

手作り石膏型と両方あったけどね。うん。まあ、ほんだで、手作りだけじゃあれだもんで、石膏型のほうも起こして、へらで磨いて仕上げるとかね。そういうことしてやって来たもんね。

そこで、誰に習ったと思うかとたずねてみた。もちろん十太郎も含めて特に誰かいたのかと思ったわけである。

方々のを見たり、まあ、親父にも教えてもらう。手をとって教えるっていうんじゃない。やっぱしね、見て覚えたよね。

やる気があるか、無いかだな。いくら手え取って教えても、やる気の無いやつは出来っこないもんね。多分ね。

「やる気が無いなら、他の仕事をね、探して行ってもいい」っていうふうには言われたわねえ。やる気のないもんがやっても何にもならんでねえ。

末男は父十太郎に後を継げとは言われず、やる気があるか無いかを確かめられた事になる。そしていったん末男が決心したら、あとは厳しく指導していったのである。十太郎は昭和45年（1970）に73歳で亡くなるまで末男と一緒にずっと働いたのである。末男は十太郎を師として鬼板の修業を積んでいったわけであるが、「見て覚える」事を十太郎から言われ、その対象となった特に印象残る職人の話をしてくれた。

見て覚えるだよ。だから、腕のいい職人さんがおったもんね。その人の作るのを見たりしてね。で、覚えて行くわけだけど。まあ、だいたいみんなそんな感じだと思うよ。

その職人の名前が都築鎌三郎といい、末男が二十歳前後の頃、鬼十へ二、三年ほど勤めたのだという。

特に教えてはくれんけどね。見てね。その人は、まあ、すごい腕のいい人だったけれども、一生職人さんで終わった人だけだ。そりゃ、ええ仕事やったね。結構職人さんで終わった人も、本当にいい仕事する人が、むしろ親方よりそういう人の腕のいい人が多かったね。

やはり親方はそれなりに鬼板の技術は持っているが、同時に鬼板屋を経営する立場にもある。鬼板屋の規模がひとたび大きくなり始めると、経営にともなう様々な雑用に親方は時間を取られ、鬼を作ることが出来なくなる傾向があるのは事実である。一方、職人は仕事が鬼を作ることなので、作ることが根っから好きな職人はどんどん技が鍛えられて行く事になる。

そうだね。それだけに没頭しとるもんでね。仕事は、やっぱり、仕事も好きだって事

もあるわね。

あれは（都築鎌三郎）、まあ、いい仕事だったね。

末男はこのように小さい頃からずっと鬼十で事実上「見て覚えて」育ってきた事になる。それを意識化させたのは父で、親方であった十太郎であった。しかし、やみくもに何でも「見て覚える」というわけではなく、そこはそれなりの修業の順序なり配慮が存在している。

まあ、はじめは、順序で言うと、どこでもそうだけど、簡単な鬼やな。当時は「雪隠せっちん又ぎ」とか言いよったけど。

「雪隠又ぎ」は初めて聞く言葉だったので問い返さざるを得なかった。今まで多くの鬼板屋で話を聞いてきたが一度も聞いた事のない鬼だったからである。

あれは便所の「せっちん」ね。その上に載せる鬼ね。それから始めたですわ。今でも、たまに売れるだけどね。簡単な鬼だけどね。それを始めは習うだわね。今でも実物あるよ。そうゆうね「雪隠又ぎ」って行って在ったんだわ。6寸くらいの大きさのね、簡単な鬼だけど。最初それやる。

その次は「一つ雲の一文字」ってやったけど。雲が一つだけ付いていて、両方へね。二つ付いていて、それを習ってね。

それからあとは「又ぎ」。足が付いたのをね。そうゆうのをやっていくだね。

そのあとは、もう、…、「吹流し」だとか、それから「影盛」だとか。その後に来ると、「経ノ巻」とか、「お寺の鬼」。そうゆうのをやるようになる。

その後に来る鬼はあるのかと続けて聞いてみると、末男は次のように話してくれた。

後は、もう、「龍が付く」のとか、「変わった鬼」ね。特殊な、復元ものになってくるわね。複雑なね。そうゆう段階だわね。

ところがこの一連の鬼瓦を修業する流れが、昭和40年ごろに起こった鬼瓦のプレス機械に

よる金型の導入によって変わってきたのである。それへの対応についても末男は語ってくれた。

で、金型ってプレスは出来るようになってから、作るもんが、そういうもんはみんなプレスで作るもんね。簡単なものは。「なかなか、習う人に教えるための鬼がね、ない」って言ってね。よう言いよったけどね。まあ、それはそれなりで、石膏型で起こしたものを、なでたり、こようカエズ型とか習って、その後は覚えてきたと思うよ。

ほだで、練習のためにやるだけで、それが市場に出回る事はないやな。今の若い人はそうやって覚えたと思うね。昔は、ほだで、そういうものを順序があって作ってね。ダメが多いもんでよ、捨てられちゃった。そんで、段々覚えていくと、売れるもんが出て来るわけだね。で、段々とね、順番にね、難しい仕事をやれるようになって、で、一人前になってくと…。

末男はこのような一連の鬼板作りの流れを語ってくれた。こういった工程を「見て覚える」やる気のあるものが、職人として年を明けることが出来るのである。末男はただ鬼瓦一般はほぼできるが不得意なものがあるという。

不得意なもんでいうと、あの、「おぼこ」みたいなのを、ああいうのは、やっぱり…。

「おぼこ」といわれ、なにか良く分からなかったので聞くと、末男は話を続けてくれた。

人の顔とか、ああいうのは、やっぱり、得手が悪い。ありゃ、変なのを作ると、人が見てねえ。ああ、これは下手だ上手だってすぐわかるでねえ。

人は知らない何かや、想像上の何かあるものに対しては比較的寛容な態度をとり、事実、それに対する許容範囲は広くなる。ところが、人が身近に接する生き物や人間のようなものになると、とたんに寛容さがなくなり、判断のものさしが厳しくなってしまうものである。末男が言う「おぼこ」はそういった人の形や生き物一般を含む類の物を言っているのである。いろいろな鬼板屋を回って鬼板師に会ってきたが、末男がここで話すように、鬼板師はこの「生き物」が一つの分岐点をなすように思われる。つまり「生き物」を作るのが得意な鬼板師と不得意な鬼板師とに大きく分けられるのである。この事実は鬼板師としての技の到達度の一つの指標をなすものかもしれない。(第4図参照)



第4図 数珠掛一文字に蛇腹を彫り込む服部末男

三代目鬼十、服部秋彦

鬼十ではすでに二代目の末男から現在は三代目服部秋彦に経営の主体は移っている。2009年7月24日に久しぶりに鬼十へ顔を出しに行ったとき、中心となって仕事をこなしていたのが秋彦だったからである。秋彦は昭和33年9月17日生まれである。生まれた頃は旧工場があった沢渡町で工場に続いて家があり、秋彦が中学三年になるまで祖父に当たる十太郎も仕事をしていて一緒に生活していたという。

おじいさん（十太郎）は僕が中学三年の時に亡くなったから。さっきも、親父（末男）の話もあったけど、よその人から見るとかなり一刻で怖い人だったみたいだね。孫にはえらいね、いろいろかまってくれて。

お酒が好きで。毎晩夕方になると晩酌をやるじゃないですか。酒の肴みたいのも、結構僕をつまんで食っていたりとか。そうゆうのしても怒られたあれはなかったし。

秋彦に小さい頃の思い出について話してもらった。そこには祖父十太郎の職人姿がはっきりと残っているのであった。

僕の小学校のときの記憶だと、なんかいろいろ大きなもの作ったりとか、^{うち}家にも写真があったんだけど。家の弟が六つ下で、その弟が保育園くらいのときに、すごく大きなお寺に載る露盤ってゆうんですけど、大きさが1メートル60センチぐらいある。その横で弟が写真撮ってるのを見た事があるんで、やっぱりやってたと思いますよ。

で、すごい小さい頃はよそから職人さんも二人ぐらい見えて、そういうのをね、なんかいろいろやっていたのを記憶には薄っすらですけど。そんな感じかな。

それから…、小さいときは遊び場ってのは工場の中で、こそこそ仕事を邪魔しないように遊んでたりとか。でも、鬼瓦の何を作ってたとか、そういうのはあまり記憶は無いですね。何となく人がいて作業しているぐらいの、そんな記憶しか。

面白いのは祖父十太郎の記憶が手作りしている作業であるのに対して、父末男に対する記憶がプレスによる鬼造りの様子として記憶に残っている事であった。

うちの親父はどっちかという、窯のほうだとか、そっちの方をやってた印象が強く。で、あとはそもそも鬼瓦は手作りだったんですけど、一時期すごく需要が増えたときにどこの鬼屋さんでもそうだと思うんだけど、プレスとか機械化してね、量産の方に走ったときにうちでもプレスを入れてよく出る並鬼とかカエズってゆうのを作っていたけれども、そっちの方の印象が強いですね。

僕はちっちゃい頃のプレスとかそんななくて、ほんとに従来の鬼屋さんの手作りだったんだけど。だから昭和45年ぐらいかな。僕が小学校の高学年くらいのときにそういうプレスとか入って、で、おばあさんも、お袋とか、親父も、そっちの方のプレスのほうがメインになってきたって感じですかね。

結果、祖父十太郎が亡くなった頃（昭和45年）鬼十では手作りからプレスによる機械化の転換が進んで行ったのである。そしてそれは世代の交代と軌を一にしていたのであった。それゆえに秋彦の記憶の中に鬼十の手作りの世界とプレスの世界が二重になって多重露出の写真のように残っているわけである。秋彦が高校を卒業して鬼十に入った時は（昭和51年ごろ）鬼十はプレス機械生産中心の鬼板屋になっていた。

で、あの頃はそういうのも（プレス製の鬼瓦）たくさん出る頃で、一日終わると、まあ、「今日は200個やった」とかね。そんな記憶はあるんだけど、今とは全然大違

いですよね。今、トンネル窯やってる陶器窯のメーカーさん、そういうところに白地納めたりとか。今とは全然仕事の形態が…。段々その時に合わせて変わっているんだけども、そんな感じかな。

最初、子供の頃は良しとして、自分がうち（鬼十）に入って最初の頃はもう数さばいてという…。売れましたからね。そういう風でしたよ。

鬼十は当時、プレス機械で鬼瓦を生産していた。ところが当然のことながら、手作り鬼の注文も入ってくるわけで、それへの対応は何と外注に切り替えていたのであった。

手作りはね、やっぱり白地屋さん（手作り）ってゆうか、外注で。やっぱりそれまでもずっとお付き合いして作ってもらっていたところがあるんで。そちらへとにかく振り分けして、作ってもらって品物の管理だけはして、後はうちに窯があるから順番に焼いて納めていたという。今考えると羨ましいくらい忙しかったというか。だから自分でこで作っていたら、ほかに出荷とか、窯の方が回らなくなっちゃって。人を入れてってほどでもなかったんでね。

秋彦はさらに鬼十の経営の変化について話してくれた。それが本来なら鬼瓦を製造する鬼板屋が鬼瓦の仲買い業をする、ブローカー的営業をする経営についてであった。

バルブがはじけるしばらくくらいまでは、どちらかという製造の方でやってるんだけど、何ていうのか、お客さんのニーズというか、注文が入ってきて、「あれがないよ、これがないよ」といって全部断っているとダメなんで。

もう、仕入れて取り売りでもして、ブローカー的な部分も含め、そうすりゃ、「あそこに任せておけば全部揃えてくれるから」って、お客さんもね。鬼を作る部分とは外れてそういう商売的なことになっちゃうんだけど…。そういう風で、しばらく続きました。

ところがバルブがはじけて経済が下向きになってきたとき、このブローカー業も上手く回らなくなってきたのであった。まず、他の鬼板屋でも同じような形態を取るところが増えてきたのである。するとしだいに利益の幅が少なくなってきたのである。その時に鬼十が採った経営上の転換は何と先祖返りであった。

まあ、いろいろあって、方向転換しようかって。「本来の形に戻らないといかん」って言って、ちょっとこっちへ来て（現在の鬼十の在る場所）、しばらくしてからは、自分のところでまた作るように。昔は親父も、まあ、大昔は自分で作っていて、一時はプレスだとか窯のほうをずっとやって、まあ、久々に作って。

平成4、5年ごろに三河高浜駅の開発があり、鬼十は旧工場の代替地として現在の稗田町へ移ってきたのである。そして平成10年ごろ鬼十は経営の舵を手作りへと切ったのである。

既製品であるものは、わざわざ作るあれでもないから、お寺なんかの既製品でないもの、だいたいどこ探してもないものは誰かが作らにゃいかんもんで。よそに出しとる（鬼瓦を）、職人さんに作らしとるよりも、「自分で作ろう」ということで。お寺のものとか。僕なんかそれまで全然何も作ったことなかったんであれでしたけれども、そんなにへらさばきの技術を必要としないものもあるんですよ。「そういうものであればやれるかな」と思ってやってみたら、そこそこ。何とか形に成ったんで。

秋彦と同じような事が鬼板屋しにせの老舗である鬼仙でも起きていたので、秋彦からこの話を聞いたときはすぐに驚くよりも先に、「あっ、同じだ」と別の意味で驚いたのであった。つまり、今まで鬼瓦を作ったことがない、鬼板屋の経営一筋でやって来た者が、40、50代になっていきなり鬼瓦を作り始めて鬼瓦が出来上がってしまうことを指す。秋彦は私が知っている限りでその種に入る二人目の人である。秋彦は次のように話している。

全然、見た事もないものだったらあれだけど、ちっちゃい頃から一応見てるじゃないですか。あまり記憶にはないけど。だから、まあ、何とか形になって。それから、ここうちで作り出して10年くらいになるかな。時代に逆行しちゃっとなるような感じなんだけど。だけど、まあ、今思うとその方が正解だったかなあって。

そうゆうプレスで一時すごく出ているのは一般住宅の屋根見てもらえばわかるけど、あんまりないでしょ。ハウスメーカー系の「鬼を使わない」ような屋根ばかりで。結局、プレスやっていたのは、その辺の鬼だからね。まあ、ちょうどいい機会だったかなって。ま、ここ来てすごい厳しいですけどね。

秋彦は実際に鬼師の世界へ入って行ったときのことを当然のことながら語っている。鬼仙のときは当の本人（第五代鬼仙、岩月清）が倒産という事をしたばかりの人物でもあり、

本人の言う事が本当の話なのかと思いつつ聞いたものである。しかも話し自体が初めての信じがたい話であったから尚更である。ところが、そばにいた息子の岩月貴が父、清の話したことは事実だと本人も驚きの感情を交えて話すので、そういうことがあるのかと受け入れた事があったのである。こうした事例を踏まえた上での秋彦の話なのでなおさら興味をそそるわけである。

一番初めに僕が作ったのはね、露盤といって、わかります、露盤なんですよ。一辺の大きさが1メートル真四角くらいの露盤で、高さがこれくらい。露盤の写真を見て、見よう見まねで。現物はなかったけど。そういうふうで作って何とか形になったんだけど。今見るとひどいもんですね。それでとりあえず屋根には載ったみたいだけど。

何と、初めて作った試作品がそのまま商品となって実際に屋根の上に葺かれたのである。メーカーからの注文だったのだが、メーカー側が見て「いい、いい、OK、OK」と言ったのである。さらに秋彦の反応が興味深い。

初めてだったからいろいろ手間もかかったけれど、やってみると「面白いものだな」って思っただけ。

これは文字通り「門前の小僧、習わぬ経を読む」を地でいっている事になる。

ほんとに、どっか行って修業したとか、教えてもらったとか。見てましたけどね、出来もせんのだけど。お客さんのとこに行ってお願いして、ものは、鬼はいろいろ見てきたんで、「ここはこうゆうふうにして作って」とか、作れないけど指示は出していたんですよ。

ちっちゃい頃からずっと見てきてたけど、初めて作ったのはほんとに40過ぎてましたよ。41、2。

へらは握ったことがないということなのかと突き詰めて私が聞くと、秋彦は次のように答えた。

まあ、そうだね、それに近いね。プレスものをしてたんで、そうゆう物のバリ取りとか、仕上げはしてたんで。だから、鬼は触ってたから、何とか手作りってゆうか、手張りだよ、型紙から図面を起こして切ってくっつけてるのは初めてで。

今まで作る工程は見ていたから、作り方はわかるでしょ。初めてでここはこうゆうふうにしたら絶対傷が出るなどか、そうゆうのは何となく、自分の感覚でわかっていたから。よそで作ってもらって、こんな傷出しちゃってそうゆうのがあったんで、そうゆうのは気をつけてやっていたんで、思った程そんなひどい事にはなっていないかったですよ。

結局、十太郎が末男にいつも言っていた「見て覚えろ」を孫の秋彦が実証している事になる。また末男が言っていたもう一つの条件である「生まれつきの器用さ」も、十太郎と末男の血を受け継いでいることから十分満たしているであろうし、その上に、やはり十太郎が言っていた鬼板師になる条件である「やる気」も、やはり強く加わっているのは明らかである。鬼十は手作りからプレス生産へと変化し、さらに半ブローカー業に移った末の決断であり、「やる気」がなければ出来る相談ではない。十太郎が要求していた二つの必要条件「見て覚えろ」と「生まれつきの器用さ」と十分条件の「やる気」がこの時、ようやく鬼十に揃ったのだ。(第5図参照)



第5図 唐招提寺型鴟尾を作る服部秋彦

さて「生まれつきの器用さ」だが、秋彦はこれに関して興味深い事を話している。やはり血は争えないものがあるといわざるを得ないなと思うところが大である。

やっぱり鬼を作るのは数こなさんとあかんね。俺は手先が器用というか、昔から絵を描いたりだとか好きだったし、自慢じゃないけど、小学校、中学校、高校ぐらいの図画工作とか、美術、そういうのは一番いい点もらっとったけど。ただ歌歌うのは音痴だけどね。だから絵を描いたりするのは昔から好きだった。

ちっちゃい頃、工場でよく遊んだって話をしたでしょ。工場が、下がこうゆう^{たたく}三和土でコンクリートで打ってあって。遊ぶってのは石膏が割れたやつ、要するにチョークみたいになるでしょう。そういうので、下に地面に絵を描いたりだとか、一人でココソやとったみたいだね。

まあ、絵描くのは好きだけど。多分ね、絵が描けんと、物は作れないと思うじゃんね。

このようにして手作り鬼瓦の世界へ復帰した鬼十であるが、やはり全て鬼十で注文に応じ切るまでにはまだ至っていないのも事実である。一口に鬼板屋とはいえ、その技量の違いは千差万別である。鬼十ではそのところは外注に出すことによって補っている。

どうしても出来ないものとか、敷居の高いものはやっぱりそれなりに今頼むところは確保してあるんで。

現在は山下鬼瓦の山下敦。昔は鬼亮の兄である梶川務に依頼していたという。私自身すでに個人的に親しくしてきた二人の名が上がったので、驚くと共にうれしくもあった。どういったところが良いのかと聞くと、一言、「丁寧」と秋彦は答えた。この丁寧もやはり、初代鬼十の十太郎が常日頃、末男に対して言っていた言葉であった。「仕事は丁寧にやらなきゃいかん」が十太郎の信条だったのである。その言葉がしっかりと三代目鬼十へと受け継がれていることになる。

まとめ

鬼十は昭和の始め頃、服部十太郎によって始められた。十太郎が生まれ育った碧南の新川町にあった鬼吉に十太郎が小僧として入ったのが事の起こりである。年が明けて職人として独立すると旅職人としてしばらく各地を転々として過ごしながら技を磨いた十太郎は高浜の石ノ塔（現在の沢渡町）へ鬼十を興したのであった。手作りの伝統的な鬼板屋である。この初代十太郎が亡くなったのが昭和45年であった。この時、すでに鬼十は沢渡町から移転し、現在の工場がある稗田町へ来ていた。さらに日本社会が建築ブームに沸き、鬼瓦生産が手作りから大量生産が出来るプレス機械生産へと転換されていた。この波に鬼十は乗り、手作りの鬼板屋からプレス生産を主力とする鬼板屋へと変化したのである。十太郎の死はこの事、つまり鬼十における「手作りの鬼」の死を象徴的に意味していた。手作りの鬼板屋がそこで事実上消えたのである。

二代目の末男は十太郎に鬼板師としての基本を仕込まれた職人として育ったが、こうした昭和40年代の社会変化に対応して、鬼十を手作りの鬼板屋からプレスの鬼板屋へと切り替えたのであった。この時代鬼十は手作りの鬼瓦を注文として受けたら外注に出して対応していた。さらに昭和末期から平成初期のバルブ期にはプレス生産から鬼瓦のブローカー業を中心とする会社に変貌していたのである。しかしバルブがはじけて社会が変わり、さらに他社のブローカー業への参入が多くなると鬼十は再度体制を切り替えたのである。平成十年ごろに鬼十は元々の鬼十の形であった手作り中心の鬼板屋へと舞い戻る決心をした。この時にやはり世代が動いている。三代目鬼十の服部秋彦である。すでにその時41歳で、過去手作りの鬼瓦を作ったことのない者が社会の変化に押されて手作りを始めたのであった。

このように鬼十の起こりから現在までを見ると、鬼板屋がいかに社会の変動と緊密に連動しているかが良く分かる。社会の変化を文字通り鬼板屋は反映する鏡であるともいえる。手作り鬼瓦の伝統の継承も社会の変化を反映している。社会が極端に需要を増加させると手作りの伝統そのものがその社会変化に対応できずに廃れ、新技術としてのプレス機械生産が開発された。ところが社会が極端に需要を減少させると、逆転現象が起き、ある意味で先祖返りのように手作りの伝統が復活し始めるのである。

また鬼板師になるには「見て覚える」のが基本である。その「見て覚える」環境は十太郎の時代は現場である鬼板屋の工場であった。そして社会に存在する現物としての主に屋根に載っている鬼瓦である。それゆえ、逆に「見て覚える」環境としての工場の中には他の鬼板師は立ち入り禁止が常識であり、マナーであった。ところが社会が変わり、メディアの技術が発展して行くにつれ、「見て覚える」環境も変わっていった。まず写真の技術の普及によって現物としての鬼瓦が限りなく質・量とも身近なものになっている。昔は見

ることさえ出来なかったものも手元においてみる事ができる。こっそり隠れて覗き見をすることもない。メディアとしての書籍類も同様の効果ないしは影響をもたらしている。現代ではパソコンが一般に普及し、特に若い世代はインターネットを通して鬼瓦の情報への接近ないしは利用も可能になってきている。服部秋彦は次のように話してくれた。

いろんな本とか、インターネットも普及しているでしょう。そうゆうんでいろんな情報拾えるんで、そうゆうので、とにかく、そうゆうのはかなり見えますよ。

まあ、現物はなかなか見れないにしても、現場行ったりだとか、そうゆう時はやっぱり勉強せんといかんよね。

現場・現物はもちろん大切であり、これなしには鬼板師の修業はありえない。しかし、この現場でさえもすでに大きく変化しているのは事実である。昔は現場である工場へは他人は入ることが出来なかった聖域であった。しかし現代はそこへメディアが入るようになっている。そして現役の鬼板師の作業風景・作業手順が一般に公開されている。全てではないにしろ、昔の事を思うと想像を超える変化である。一般の人にとってはその価値はほとんど無いに等しいと思われる。ことわざで表現すれば「猫に小判」といったところである。一般の人はむしろ各地の世界遺産のDVDなどの方がよほど興味を持って見ることが出来る。しかし、現場の鬼板師にとってはその価値は計り知れないものがある。それは「猫に小判の逆」の世界に住む人がいることを意味している。文字通りのノウハウの公開といていい。秋彦の言葉が鬼板師の「見て覚える」環境の変化を明白に物語っている。

鬼亮さん。あのあたりの鬼面の、まあ、物真似ってゆうかね。作り方とかもね。たまたま、以前に組合で作った、文化庁かなんかの補助で作ったのが（ビデオ）あるんだけど、あれで鬼亮さんが自分のやり方をパーッと公開して、それで観て、「ちとやってみようかな」ってやってみたら、「こりゃいいや」と思って。とりあえずそれで何とか。でも鬼亮さんの足元にも及ばないけどね。

ここまでは一般の情報を受け取り「見て覚える」環境へ取り込む動きについて言及したが、鬼板師たちは今では逆に自ら「鬼師の世界」についての情報を発信するようになっていく事もある。まずその動きのはじめが2000年の『三州鬼瓦総合カタログ』の発行であろう。それまでにもいくつかの鬼板屋は単独でカタログの発行はしていた。しかし、この時、はじめて鬼瓦組合が共同して三州鬼瓦の全体像を世間に向けて提示したのである。このカタログをもとに全国から問い合わせが来るようになったのは間違いない。

次なる情報の発信の動きが2007年11月に始まった三州鬼瓦製造組合のホームページの立ち上げである。このホームページの製作運営でもって、より一般社会への情報発信が可能になり、鬼瓦や瓦の関係者からだけでなく、広く一般の人々から「鬼師の世界」への問い合わせが可能になってきている。現在、三州鬼瓦製造組合の組合長をしている秋彦はホームページ立ち上げに直接関わった人物である。

最初、組合のHP（ホームページ）を作ろうだとかいった時にはね、「そんなもの作って何になるかい」って言われたんだけど。僕もたまたまパソコンとかインターネットの触るのがちょっと早かったんでやってみたら、そういうので引き合いもあるし。

全然鬼瓦に興味のない素人さんからそういうのが来て。商売でやってると業者間だけじゃないですか。いろいろ問い合わせがやっぱり。直接、設計事務所だとか、そういうところからも月に1、2件はね。問い合わせだけだけど。それが実になることは10分の1ぐらいだけど、いろいろ問い合わせが来るから、間口を広げておいて正解だったかなと。

立ち上げの経緯も秋彦は語ってくれた。記録になるのでここに付け加えたい。

たまたま、三州瓦工業協同組合、あそこはかなり前からHP持ってて、HPをリニューアルするときに、僕はそこの理事にも何もなっていなかったんだけど、鬼十さんパソコンそこそこいじれてインターネットも詳しいらしいって話がどっかから入って、「お前ちょっと来い」ってなって。

最初、HPをリニューアルするときにかかわらせてもらって、その時に、HP作成する業者とも面識が出来て、で、「割とこの県で補助金だとか、そういうの使うと割と安く作れるから、どう」なんてことで。組合にもそういうことちょっと話したら、「ちょっとやってみるか」って意見もあって、逆に「そんなもんしたってどうなるんだ」って話もあったんだけど、「そんなにお金かからずやれるからやってみよう」ってことで、やってみて、ほんでまだ2年位かな。

現在はアクセス数は一日に7～80件。多いときは100件を超えるという。少ない日で30件。立ち上げた当初は10件～20件だったという。運営しているのは秋彦で二日に一度の割合で一時間ほどかけては更新していると秋彦は言う。

鬼十に限らずではあるが、今回鬼十をまとめるに当たって改めて鬼板屋がいかに社会の

変化と連動して鬼板屋自体を変化させて今日に至っているかを再確認させられた次第である。

参考文献

- 石田高子 1983年『葺のうた』愛知県陶器瓦組合
 駒井綱之助 1963年『粘土瓦読本』彰国社
 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合
 2000年『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合
 杉浦茂春編 1962年『高浜市資料(六)』高浜市
 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』
 高浜市伝統文化伝承推進実行委員会
 高原隆 2002年「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247
 — 2003年「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189
 — 2003年「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132
 — 2004年「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(1)」『文明21』第12号：113-165
 — 2004年「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(2)」『文明21』第13号：155-175
 — 2005年「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(3)」『文明21』第14号：97-111
 — 2005年「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号：183-208
 — 2006年「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(2)」『文明21』第16号：93-116
 — 2007年「鬼師の世界—黒地：丸市、(杉荘)、萩原製陶所(1)」『文明21』第19号：55-72